

2021年 第40回福島県臨床細胞学会総会・学術集会

一般演題Ⅰ. 「私の1例、当科の1例；県北地区の症例から」

口演：子宮頸部原発悪性黒色腫の一例 演者：斎藤美穂

【はじめに】婦人科領域の悪性黒色腫は全悪性黒色腫の1~4%とされているが、大部分が外陰、陰原発であり、子宮頸部原発とされる悪性黒色腫は非常にまれである。今回、判定に苦慮した子宮頸部原発の悪性黒色腫の一例を経験したので報告する。

【症例】60代女性、4妊2産、閉経50歳、不正性器出血を主訴に医療機関を受診。陰鏡診にて子宮頸部に腫瘤を認め、子宮頸がんを疑い子宮頸部細胞診が施行された。細胞診検査が当施設に委託され、間葉系の悪性腫瘍（肉腫）を疑い、適正 Other malignant neoplasms と判定を行った。その後、高次医療機関に紹介され、陰鏡診にて子宮頸部に易出血性、直径50mm腫瘤性病変、PET-MRIでは子宮頸部に長径70mmの腫瘤性病変、集積は仙骨部にみられ、その他に転移を示唆する所見は認められなかった。子宮頸部生検が施行され、子宮頸部悪性黒色腫と診断された。治療は病変部に対し放射線治療とニボルムマブ投与が行われた。3か月後、性器出血はほぼ消失し、造影CT検査では、子宮頸部病変の縮小を認めたが、新規骨盤内リンパ節転移がみられた。

【細胞所見】背景は血性でライトグリーン物質と破碎細胞がみられる中、標本一面に散在性細胞が出現していた。細胞形は円形~多稜形、核は中心性~偏在性、核腫大を認め、クロマチンは増量、不均等に分布し悪性細胞と考えた。一部に上皮性結合を示す集塊もみられ、また、核縁は菲薄で、多核細胞や大型核小体、巨細胞が出現し、異型が強く、組織推定に苦慮した。

【組織所見】HE像で細胞接着性に乏しく、細胞質比の大きい腫瘍細胞が壊死を伴い充実性に増殖していた。メラニン顆粒を有する細胞はごく少数で全体の1%に満たなかった。免疫染色でMelanA、HMB45、Vimentinがほぼすべての細胞で陽性、S100、AE1/3は陰性、Ki67陽性率は40%であった。以上から悪性黒色腫と診断された。

【まとめ】本症例は悪性とは容易に判定できたが、組織型の推定には至らなかった。結果を踏まえ標本を詳細に観察すると、悪性黒色腫に特徴的なメラニン顆粒を有する細胞や核内細胞質封入体（Apits小体）が少数認められた。また、悪性黒色腫は低分化癌、肉腫との鑑別を要する多彩な細胞像を呈することが分かり、この症例の経験を活かし、今後の鏡検に役立てていきたい。